

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	児童の「漢字を読む能力」の育成に関する考察
Author(s)	大内, 良彦
Citation	教育研究所紀要(25): 137-144
Issue Date	1993
URL	http://hdl.handle.net/10109/8554
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

児童の「漢字を読む能力」の育成に関する考察

大内良彦*

1. はじめに

第19期国語審議会は、平成4年6月に「現代の国語をめぐる諸問題について」(審議経過報告)を公表した。現代社会の各分野において、国語のどのようなことが問題とされているのか、問題点を洗い出し、整理することを試みたのである。そこでは、「情報化、国際化の進展は人々の予想を越える速さで進んでいる。エレクトロニクスによる情報機器の発達と国際的な通信手段の拡大は言語生活にかつてなかったような新生面を開きつつある。」とした上で、情報機器との関連で漢字に関わる問題点として、次のような事項をあげている。¹⁾(項目については筆者が一部を抜粋した。棒線は筆者による。)

現代の国語をめぐる諸問題(委員から出された主な意見)

国語教育に関すること

- ・ 漢字を読む力を伸ばすことが必要ではないか。
 - エレクトロニクスの急速な発展は従来の国語審議会の予測し得なかったもので、漢字を書くこと(入力)は簡単になり、それを読む能力が大切になってきた。ワープロなどの普及とも関連して、読む漢字と書く漢字の区別、読める漢字を増やす必要があるかどうかなど、十分考える必要がある。
 - 学校教育における漢字の読み書きの指導については、「常用漢字表」を基本としており、読める漢字を増やすということによってそれ以上の指導を行うとすれば、まず「常用漢字表」の見直しをする必要があるのではないか。

国語審議会として今後更に審議を深める必要があると思われる問題

情報化への対応に関すること

- ・ 情報機器の発達とこれからの国語の能力の在り方
 - ワープロ等の情報機器の発達に伴うこれからの国語の能力の在り方について考えておく必要があるのではないか。特に、筆記能力、文章表現力、思考力にどのような影響が及ぶことになるのか、十分考えておくべきである。また、仮名漢字変換方式の普及によって、漢字を用いることは容易になりつつあるが、それに伴って漢字を読む能力の重要性はむしろ増大する事が予想される。漢字を読む能力の伸長を図るために、振り仮名の活用等についても社会一般に配慮する必要があるのではないか。

この報告では、社会の文字言語情報量増大への対応から、「漢字を読む能力」を重視し、その育成を図るために、常用漢字表の見直しなども含め、読むことのできる漢字の字種を増やすこと、そして、振

* 茨城大学教育学部附属小学校

り仮名を活用することにより、日常的に多くの漢字の読み方に慣れさせることなどの必要性を示唆している。また、こうした点に関連して、小林一仁氏も「読むことのできる漢字を増やすためには、振り仮名を用いて漢字の外形と読み方との対応関係に慣れさせることが必要である。」と述べ、「漢字を読む能力」を育成するために、積極的に振り仮名を活用していくことの重要性を指摘した。²⁾

小学校における読み書き及び、その使用を目指した漢字の総合的な習得³⁾が、現状で学年別漢字配当表に示された1006字種にも及び、中学校でも3年間の就学期間の中で、学年別漢字配当表の漢字について「使い慣れ」、「文章の中で適切に使うようにする」⁴⁾とした上で、さらにそれ以外の常用漢字939字種について「大体も読むこと」⁵⁾というように漢字の習得に対する学習負担が膨大となっている。そこで、こうした状況を考えれば、小学校、中学校の学習者に対する学習負担の増大を避けるという意味合いからも、安易に常用漢字の字数や学年別漢字配当表の字数を増やすのではなく、振り仮名の活用を進める、あるいは小学校教育の中にも「読める漢字」「書ける漢字」というような新たな枠組みを設けることによって、読みの経験的な量を増やし、漢字を受け入れる素地を作ることを通して、「漢字を読む能力」の伸長を図るという方向に審議の進むことを期待したい。

しかし、「漢字を読む能力」について考えていく場合、こうした異なる漢字、あるいは読み方を総量的に、学習者の中で増やしていくという量的な発想とともに、文脈の中や熟語、単語としての漢字を識別し、意味を正確に理解すること、未知の漢字についても既知の学習経験を生かして意味を類推することなど、「漢字を読む能力」そのものについて質的な観点から捉えていくことも必要であろう。「漢字を読む」という行為が、単に漢字の音訓の読み方を問題とするのではなく、そこに内在する意味内容を正確に、しかも豊かにつかみ取っていくことを目指しているからである。

そこで本稿では、「漢字を読む能力」の質的な側面に焦点を当て、情報化という視点を踏まえながら「漢字を読む」ということはどのようなことか。」ということについて考察を加える。そして、その結果を踏まえた上で、これからの情報化社会に対応する新しい「漢字を読む能力」を育成するためには、どのような学習指導を加えることが適切であるのか、その方向を示してみたい。

2. ワープロと漢字の読み

ワープロなどの情報機器の急速な社会的な普及は、これまでの「漢字を『読む』『書く』」ということに対する認識に少なからず変化をもたらすであろう。ワープロの場合、漢字を書く（印字する）のは機械であり、書き表すためにより大切な過程は、表示画面に提出された漢字に対する適否の正確な判断と、同音・同訓の漢字群の中から、自らの意思に即した適切な字種の漢字を識別し、選択するという行為となる。自ら表示画面に文・文章を書きながら（打ちながら）、同時に変換された漢字を読み、そこに表された漢字の中から適切なものを確定していくということになるわけである。

そのために、これまで手書きで「書く」際に個人の意識の中で行われていた適切な漢字を選ぶための識別という過程は、ワープロの表示画面上の漢字群からの視覚を伴う識別・選択という「読む」過程に内包される。そして、自らの手を使って「書く」という活動は、省かれてしまうのである。

従来の「読む」能力では「音・訓読みができること」「意味が理解できること」という要素が強く、他の漢字との識別は、学習者個人の意識の中でなされることであり、国語科で識別という内的な過程まで視野に入れた指導は少なかつたと言える。「読み」に対する学習は、一般的に教科書教材に提出される新出漢字・読み替え漢字について、個別に外形と読み方や意味を教師が説明する、あるいは、

学習者が調べることが多く、知識として得たそれらの個別的な言語情報を分類・整理し、自らの中で的確に識別・選択できる力を培うことは、個人に蓄積された知識の中で無意識的に行われているに過ぎなかった。そして、同音異義語・同訓異字などの漢字について、それらを集め、外形的・意味的な違いを理解させる指導の多くは受験に備えた漢字テストなどに対応するための特殊な漢字に対するものであった。

もちろん、漢字の読字力は、「読む」「書く」ための学習が複合的に絡み合って形成されていくものであろうが、こうした従来型の「読む」学習では、識別・選択に関わる内容が弱く、情報化時代を支えるワープロなど情報機器を活用し

ていくために必要な「読み」の識別・選択という能力を向上させることは難しい。小林一仁氏は、「ワープロ時代の漢字教育は、学習者が獲得している語句・語彙に応じて漢字表記の文字の形の識別を視覚的に行わせる指導を優先してくることになる。」と述べて、従来の漢字指導とは別個の、視覚的な識別能力を育成するための指導を構想する必要性を提言している。⁶⁾つまり、ワープロなどの情報機器活用を念頭に置いた「漢字を読む能力」というのは、ある語句・語彙について、単に音訓読みを使って言葉で言い表せる、意味を理解することができるということだけを指すのではなく、視覚を通して漢字の外形を捉え、それと記憶にある目指す漢字の外形・意味とを照合しながら正確に識別し、自らに必要な漢字を適切に選択することのできる能力を強めたものでなければならない。そして、この視覚的な識別能力こそが、今までの指導過程では漢字を読む行為そのものに隠されていた、書くべき漢字を考える際に学習者の意識の中で行われていた識別・選択という能力と同質のものなのであり、ワープロなどの情報機器がその過程を表示画面上で視覚化したために、情報機器の有効利用の立場から、こうした学習者個人に任されていた識別・選択という能力を「情報化時代に求められている『漢字を読む能力』」として、クローズアップし、鍛え高める必要性が生じてきたものといえる。

3. 漢字の識別・選択における特徴

では、ワープロなどの表示画面による視覚を通した漢字の「識別・選択」の過程とは、どのようなものなのであろうか。漢字をどのように見て、自らが適切だと考える字種を選び出していくのか、具体的な調査に現れた実態をもとに考察を行った。

	従 来 型	ワープロ対応型
読	<ul style="list-style-type: none"> 音読み・訓読みなどを用いて、言葉で漢字の読み方を言い表すことができる。 漢字の持つ意味を理解することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 音読み・訓読みなどを用いて、言葉で漢字の読み方を言い表すことができる。 漢字の持つ意味を理解することができる。 情報機器に提示された漢字や同音・同訓の漢字について識別し、自らの意思に即したものを選択することができる。
書	<ul style="list-style-type: none"> 自らの意思に即した字種の漢字について、意識のなかで識別・選択し、正確に再現する。 適切か確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 〔情報機器が印字し、再現する。〕 適切か確認する。

表1 漢字の読み書き能力の内要比較

調査対象 小学校1年生, 小学校3年生, 小学校5年生 各3名
 調査年月日 平成3年9月9日
 調査方法 ワープロを使い当該児童の任意に平仮名入力をさせ, 提示された同音・同訓の漢字について, 自らの意思に沿った字種を選択させる。その際選択した理由を質問し, 解答させる。

表で使われる記号について

C = 児童の行動 ● = 児童の発言 T = 教師の発問・指示
 ①～⑥ = 示された数字が, 学年別漢字配当表における学年配当を示す。
 ① = 学年別漢字配当表に示された漢字以外の常用漢字
 ◎ = 常用漢字外の漢字

代表的な事例における活動と反応について (抜粋)

事例1 小学校1年生男子

児童の活動と反応	漢字選択の理由・備考
C 「そんごくう」と入力し, 変換する。 「損ご空」と画面に表示された。 C 再び「そんごくう」と入力し直す。 T 単漢字変換の方法について指示する。 C 「孫吾空」と変換する。 ● 似ているけれど, これでいいの?	<ul style="list-style-type: none"> ・孫吾空 (④◎①), 正しくは孫悟空 (④①①) ・「損」が自分の目指す漢字と異なることはすぐに気づいている。漢字の外形が全体的に違うことから区別した。 ・「吾」については「悟」と混同している。「りっしんべん」に対する記憶が欠けている。

事例2 小学校3年生男子

児童の活動と反応	漢字選択の理由・備考
C 「ごはん」と入力し, 変換する。 「ご飯」と画面に表示された。 T 単漢字変換の方法について指示する。 C 「ご」について変換する。画面に出た多くの「ゴ」の読みを持つ漢字群の中で, 「悟」と「梧」で迷う。 ● どっちも似てる。 C 「悟」を選択し, 「悟飯」と確定した。	<ul style="list-style-type: none"> ・ご飯 (④), 正しくは悟飯 (①④) ・「ご」が漢字であることに気づく。 ・画面に表示された「ゴ」という読みを持つ漢字群の中から, 「吾」の要素のあるものを見つけようとした。 ・「吾」という傍については, はっきりと覚えていた。偏については縦長の要素を持つものであることは意識していた。確定理由は特はない。

事例3 小学校5年生女子

児童の活動と反応	漢字選択の理由・備考
<p>C 「えねるぎーをしょうもうした」と入力し変換する。 「エネルギーを消耗した」と変換される。</p> <p>● 消えるということだから。</p> <p>C 「ませんこう」と入力し変換する。 「間千項」と変換される。</p> <p>C 単漢字変換を行い、「魔」「閃」「光」と選択し、確定する。</p>	<p>・消耗 (③①)</p> <p>・「なくなる」という意味(消)の漢字があることから、この熟語で正しいと判断した。</p> <p>・「魔閃光」(①②)</p> <p>・この言葉が漫画の登場人物で悪魔の使う技であるから「魔」を選択。「閃」をもとに「人」のついた漢字を外形から選択。この言葉が「光」の技であることから「光」を選択。</p>

これらの事例から、ワープロなどで漢字を識別・選択する場合のおよその傾向を、いくつかのケースに分けて捉えた。

◎ 熟語として漢字を識別する場合（「消耗」の他に、「將軍」「長老」「急激」「戦闘力」などの語句が見られた。）

熟語として画面に表示された場合には、

- ・ 熟語に対して、それを構成する漢字の外形を記憶している場合、表示された熟語の外形と記憶との比較により、両者が一致したために表示された熟語を正しいと判断した。
- ・ 熟語自体の意味を捉えている場合、熟語を構成する漢字の中で意味の分かる漢字があり、それが熟語の意味と共通なものであったために表示された熟語を正しいと判断した。

という2つのケースが見られた。

◎ 単一の漢字として識別する場合（「孫」「悟」「飯」「魔」「閃」「光」の他に、「特」「族」などの漢字が見られた。）

単漢字変換になったケースである。この場合、該当する読みに対して、同じ読み方を持つかなりの数の漢字が画面表示されている。

- ・ ここにあげた1年生の児童の場合、学校で学習していない漢字（「損」「孫」）でも、経験による記憶に基づき、漢字全体の外形を判断し、選択することができた。
- ・ 「悟」の場合、児童は自らの中にある求めるべき漢字に対する記憶を頼りに、まず旁「吾」を持つ漢字を選択していった。次に偏について適切だと思われる要素を選択するという段階的な過程をとった。
- ・ 「閃」の場合、児童は自らの中にある求めるべき漢字に対する記憶を頼りに、まず構「門」を持つ漢字群を選択していた。次に構の中に入る部分について適切だと思われる要素を選択するという段階的な過程をとった。

熟語の場合は、それを構成している漢字の外形について記憶があり、熟語自体の意味を理解しているか、または、その熟語がどのような場面で使われたものであるかを知っていれば、画面に表示された同一の読み方をする熟語群の中から、自らの求める字種の熟語を識別し、選択できる。また、意味を知っている熟語の中で、自分の理解できる漢字があれば、それを根拠に自らの求める字種の熟語を

識別し、選択することができる。

単漢字で識別していく場合には、漢字の外形に対する記憶をもとに識別していく。また、部分的な要素に対する記憶をもとに識別していくこともできる。そして、この場合、要素間に識別する順序があるものと思われる。この識別の順序として、児童の中で初めに行われるものを第1次識別、続いて行われるものを第2次識別とすれば、第1次識別では、自らの記憶に基づき、選択する核となる要素（例えば「吾」）のついた漢字を表示画面に示された同じ読みの漢字群の中から探す。そして、この要素を持った漢字が見つかりと第2次識別として、それ以外の部分（例えば「卜」）について識別を行う。目標とする漢字（例えば「悟」）が見つければ、そこで漢字が確定される。

表示画面上の漢字を識別し、選択するという行為では、漢字の要素に対する部分的外形識別、漢字全体に対する外形識別など、漢字の持つ外形そのものに対する記憶が有効に働く場合と、そこに意味的な理解が加わり、語句・語彙としての内容理解が識別に有効に働く場合とがあるものと考えられる。

4. 発達段階による漢字識別方法の違い

さらに、発達段階によって識別に一定のスタイルが認められるのかどうかを調べるための調査を行った。もちろん、こうした識別のスタイルは、個人差が大きいためであろうと思われる。しかし、大まかな傾向が認められれば、それをもとに、効果的に漢字を識別し、選択する能力を育成するための指導内容・指導方法を考えるためのヒントが得られるものと考えたのである。

調査対象 小学校1年生 32名, 小学校3年生 36名, 小学校5年生 40名

調査年月日 平成3年10月14日, 12月2日

調査方法 児童の間で人気のある漫画週刊誌に掲載されている漫画「ドラゴンボールZ」において使用される漢語について、漢字を一字ずつに分け、その一字ずつについて同音、あるいは外形の似たいくつかの漢字を混ぜて児童に提示し、その中から適切だと思われる漢字を選択させる。その際、選択した理由を児童に問い、その傾向を調べる。⁸⁾

出題形式例	そん (村, 孫, 損, 存, 尊, 遜)	問題例	{ 孫悟空 治療 戦闘力 防御 攻撃 変身
	ご (悟, 五, 誤, 御, 語, 後, 呉, 吾)		
	くう (空, 食, 公, 句, 久)		

ここでは、正答率などを省略し、その漢字を選択した理由についての調査結果について述べる。

質問内容 その漢字を選んだ理由は何ですか。	1年生	3年生	5年生
語句に使われている漢字全体の形から (例 防御)	30.4%	46.8%	86.2%
語句に使われている漢字の一字の形から (例 御)	39.1%	31.3%	10.3%
語句に使われている漢字の一字の部分から (例 卸)	30.4%	29.1%	3.4%
その他 (なんとなく, 無答など)	39.1%	0%	0%

表2 漢字選択の理由について

選択肢の中から、児童自らが適切な漢字であると判断した理由について、どの学年でも「語句に使われている漢字全体の形に対する印象」を多くあげている。しかし、低学年、中学年の場合、「漢字一字

の中の部分的な要素の形に対する印象」の割合がほぼ30%に達している。これは、低学年、中学年の児童が漢字を要素の単位で部分的に判断し、選択していく傾向のあることを示している。つまり、漢字を識別する際に部分的な要素の外形として記憶されやすい部分があり、その部分を核として意識しながら識別していくということであろうと思われる。そして、こうした部分的な判断の傾向は、高学年で割合が極端に減少し、逆に学年が進むにつれて、熟語を構成する漢字すべての外形を包括的に判断するという割合が増えてくる。こうしたことから、漢字識別の基盤には、漢字一字の部分的な要素を核とする外形判断があり、それは漢字に対する学習経験の積み重ねによって、要素と要素、漢字と漢字とを連続的、総合的、即時的に判断できる視覚的な認識力になっていくものと推測される。

5. 情報化社会に適した「漢字を読む能力」を高める学習指導について

このような調査から、情報化社会に適応できる「漢字を読む能力」(情報機器使用における漢字を識別し選択する能力)を育成するために、従来の漢字指導につけ加えて、以下のような学習指導を構築する必要がある。

- 漢字を形作る要素単位の認識力を高める。小学校低学年では、学年別漢字配当表に示された配当漢字の多くが、後に学習する漢字の核となる構成要素であることを考慮し、成り立ちから外形と意味、読み方を関連づけるなどの指導を行い、外形識別のための根拠をつかむ習慣を身につけさせる。また、低学年のうちから、会意文字や形声文字では、漢字を構成する要素を色などを使って視覚的に分離させて認識させるようにし、学習者に漢字を構成する要素単位で記憶するための核を形成することができるようにする。そのためには、漢字専用の黒板、ないしはフラッシュカードなどに漢字を書いて、その漢字の提出される教材、あるいは単元の学習中、それを日常的に学習者の目に触れさせるようにする。小学校中学年以降になれば、形声文字などにおける意符の意味もつかませるようにし、学習者の漢字の要素に対する興味・関心を高めるようにする。

- ・ 新出漢字の指導の際にはいつも共通する要素を持つ漢字群を提示し、その中で外形的、意味的、用法的な違い明らかにすることにより、似たような漢字における識別力を高める。そのためには、教師の新出漢字に対する十分な教材研究が必要となる。
- ・ また、新出漢字指導の際には、同音異義語、同訓異字の主だったものについて提示し、意味内容から区別させるようにする。⁹⁾漢字指導の時間が多くとれない現状では、学習プリントなどを工夫することも考えられる。
- ・ 小学校高学年では、熟語などの指導で意味を明確に捉えることのできるような指導を行うことにより、読書などで熟語の意味を漠然と理解して読むのではなく、それを構成する漢字の単位で理解しようとする習慣をつけさせる。具体的には、熟語を構成する漢字を読み下して意味を確かにするなどの学習を取り入れる。また、未知の熟語に対しても、それを構成する漢字から意味を推測するなどの学習訓練を行い、その上で辞書を使って意味を確認するようにさせる。
- ・ ワープロなど情報機器を学校教育の場に取り入れることにより¹⁰⁾、同音異義語・同訓異字の使い分けを具体的に練習することもできる。これについては、小林一仁氏が、ワープロを「漢字を記憶するための学習に利用するには、熟語や短文において正しい意味(概念)を伝える文字(つまり、図形)を適切に選択できるかどうかにかかる練習をする時に利用する。」として¹¹⁾、その有効利用を漢字指導の面から捉えている。

本稿の一部は平成3年度文部省科学研究費補助金(奨励研究(B))によった。

最後になりましたが小林一仁先生には、数々のご指導をいただきましたことを深く感謝いたします。

注

- 1) 国語審議会「現代の国語をめぐる諸問題について」(審議経過報告) H4.6.18 P9,P13,P15
- 2) 小林一仁 茨城国語談話会 H4.9.30 助言指導より
- 3) 文部省「小学校指導書国語編」(ぎょうせい) H1.6 P103
- 4) 文部省「中学校学習指導要領」(大蔵省印刷局) H1.3 P14
- 5) 文部省「中学校学習指導要領」(大蔵省印刷局) H1.3 P14
- 6) 小林一仁「ワープロ時代の国語教育, 小考」『教育ワープロに関する調査研究 総合報告書』(日本教育工学協会) H.3.3 P196
- 7) 8) この二つの調査では、鳥山明原作少年ジャンプに連載されている「ドラゴンボールZ」における使用語彙を対象にした。詳しくは、拙稿文部省科学研究費補助金報告書を参照されたい。
- 9) 拙稿 文部省科学研究費補助金報告書『『同音異義語・同訓異字』指導のための基本表』を参照。
- 10) 日本教育工学協会「教育ワープロに関する調査研究総合報告書」H.3.3 に詳しく述べられている。
- 11) 小林一仁「漢字の系統的指導」(明治図書) S.59 P100